

乳歯の遺残

犬や猫の歯は二生歯性で、人と同様に乳歯から永久歯に一生涯に一度だけ生えかわります。乳歯は生後3ヶ月前後より切歯（前歯）から抜け始め順次永久歯が萌出し、通常生後7ヶ月時までには全ての歯が永久歯となります。二生歯性では乳歯と永久歯は同一歯槽内で発生しますが、正常であれば永久歯の歯根の一部が形成される時期に乳歯の歯根が吸収されることにより乳歯は脱落します。乳歯の遺残は、脱落するべき乳歯の歯根の吸収が不完全であったりまったく吸収されなかったりすることにより、乳歯と永久歯が併存している状態をいいます。遺残する乳歯は乳犬歯と乳切歯がほとんどです。犬では特に小型犬種で発生が多く、猫では稀です。

{ 臨床症状 }

乳歯の遺残は、永久歯の萌出障害や不正咬合（かみ合わせの問題）、歯肉や口唇の損傷などを引き起こしたり、また乳歯と永久歯が併存することにより歯垢や歯石が付着しやすくなり、何年も放置しておくとう歯肉炎や歯周病を引き起こしやすくなります。

{ 診断 }

身体一般検査所見：通常幼齢時の定期検診で発見されます。無処置で何年も放置されている場合は、歯肉炎、歯周病、歯石の付着、不正咬合による歯肉や口唇の損傷などが合併してみられることがあります。

口腔内 X 線検査所見：歯根の吸収の程度や、本来歯槽内にあるべき永久歯の有無を確認するために麻酔下で口腔内 X 線検査が必要となる場合があります。

{ 治療 }

外科療法：生後7ヶ月以降でも乳歯が脱落しない場合、全身麻酔下で抜歯処置を考慮する必要があります。もし永久歯に歯石が付着してたり、歯周病を合併している場合は歯石除去などの処置も必要となります。

内科療法：もし歯周病が進行している場合は、外科的処置の前後に抗生物質や抗炎症薬を投与する必要があります。

経過観察：処置後の経過は通常良好です。抜歯後歯肉を縫合した場合は定期的に縫合糸の状態を観察します。吸収系（溶ける系）で縫合するため抜糸は必要ありません。歯石除去を実施した場合は、歯石の再付着を防ぐために歯磨きなどの処置が必要です。

合併症：歯肉炎、歯周病、歯石の付着、不正咬合による歯肉や口唇の損傷などが合併することがあります。

乳歯遺残は比較的早期に処置を行えば永久歯に影響が出ることはありません。ただ処置をせずに放置しておくとう歯石の付着、歯周病や不正咬合（かみ合わせの問題）の原因となり、永久歯にも悪影響を及ぼします。また小さい頃から口の中をさわっても嫌がらないような癖をつけておきましょう。そうすることによって歯磨きの実施が可能になり、また歯の病気の早期発見にもつながります。